

平成 26 年度 定年退職教員送別懇談会

2015 年（平成 27）3 月 16 日（月）

東工大蔵前会館 くらまえホール



2015 年 3 月 16 日（月）に“くらまえホール”で定年退職教員送別懇談会が開かれ、懇談に先立ち、学長の挨拶、記念品贈呈、定年退職教員の挨拶がありました。司会は、武藤滋夫 送別懇談会発起人が務めました。退職予定の 30 名のうち、20 名の先生方にご出席いただき、お一人約 3 分で思いを語っていただきました。概要を以下に記します。

文責：博物館 資史料館部門 広瀬茂久
写真：総務部 総務課 & 広報・社会連携課



三島良直 学長

皆さんが入学されたときは、全国的に大学紛争がエスカレートし、本学でも過激派学生によって正門が封鎖されているという異常な状況でした。そんなわけで、本学とは衝撃的な出会いをされた先生方も多いかと思いますが、そういう世代の方々がこうして定年を迎えられるのは、私も皆さんと同世代だけに、感慨深いものがあります。多くの先生方とは学生時代から今日に至るまで、いろんな所でご一緒し、苦勞をともにし、いろんな工夫をしてきました。この強い絆を大切に第 2 の人生を力強く歩んでいただきたいと思います。そして東工大を故郷のように思っずずっと見守っていただければ幸いです。

藤田 隆夫（数学専攻）

大学設置基準の大綱化，大学院重点化，法人化などを当事者として経験し，制度改革のために多くの時間を割かなければならなかった。これが終われば，次は本務に専念できると期待しながら頑張ったが，その次，またその次で，最後は自主的な教育改革・組織改革の荒波の中に身を置くことになり，老眼で読みにくくなった事務的な書類と格闘しつつ定年の日を迎えることになった。改革の成果が実感できないまま世話になった大学を去るのは非常に心残りだが，大切な時間を無駄にしないで欲しいと切に願う。



奥田 雄一（物性物理学専攻）

優秀な学生と恵まれた研究環境で 27 年間過ごせたことに感謝するとともに，今後は外から故郷ともいえる東工大の発展を見守りたい。研究戦略室などの「室」制度ができ，室員としてのかかわりから他分野の方々と知り合いになれたのは大変よかった。研究室を閉じるために後片付けをしていたところ，MIT に視察に行った時のノートが出てきたが，そこに MIT では Education, Research, Committee の 3 要素を大事にしているとメモ書きされているのを見つけて，東工大も同じ方向を目指しており，私自身も 3 要素を満喫できたのではないかと感謝している（多少 workaholic 的にならざるを得なかったが）。



藤本 善徳（化学専攻）

バリケード，一般教育化学の世話人，最終講義の準備でこれまでに研究室で接した学生を辿っていたところ 100 名近いことが分かり，感慨深いものがあった。何といたっても物質科学専攻の立ち上げと運営が大変だった分，印象に強くの残った東工大生活だった。



益子 正文（化学工学専攻）

多感な若い学生と接することができたのは大学教員の特権で，東工大でそういう機会に恵まれたのは幸せだった。自動車部の顧問を引き受けて，研究室の学生とは違って全く利害関係のない付き合いができたのも私の人生に色を添えてくれた。緑ヶ丘駅の改修に伴う部室の移動等に関する交渉も通常では経験できないもので忘れがたい。



TANTHAPANICHAKOON WIWUT (化学工学専攻)

東工大との正式な出会いは、1980年代の初頭に日本とタイとの間で石油化学関連の共同研究を始めることになり、私がタイ側のまとめ役として来日したときだ。そのとき目にした昔の大岡山駅をよく覚えている。その後、縁あって2011年に東工大に採用された。4年間教授を務めたが、世界的な研究機関である東工大で、タイ人としては最初となる正規の教授として仕事ができることは大変光栄かつ素晴らしい経験だった。1990年には、藤田重文教授の著書をタイ語に翻訳したが、その本はタイでは初めての化学工学ハンドブックとして重宝されている。優秀な学生たちの指導を通して、私自身も多くのことを学ぶことができ感謝している。今後はタイに戻り、SCG ケミカルズの上級研究員として仕事を続けたい。(参考:私のチュラロンコン大学時代の化学工学科の学生で 東工大で博士号をとった Pailin Chuchottaworn Kun は現在タイ石油公社の社長で蔵前ジャーナル No. 1049 (2015 Early Summer) 号にインタビュー記事があるので見て欲しい)



齋藤 義夫 (機械制御システム)

入学してみたら正門がバリケード封鎖されていた。それ以来、千葉大学に出ていた10年を除く、30年近くを本学で過ごした。大変よい経験をさせてもらったと感謝している。団塊の世代の最後の生まれということもあってか、いつも自分が主役と思って過ごしてきた。学生時代はこれでもいいが、教員になってからはこれでは困るわけで、反省している。これまでに多くの改革にも関わってきたが、学生のためというより大学のためという視点が強かった気がする。現在進行中の改革が真に学生のため、そして若手のためになることを切に願う。



鈴木 暁男（機械宇宙システム専攻）

バリケード上の学生と喧嘩したのは私ぐらいだろう。受験の下見に私が構内に入ろうとしたら、彼等が「君たちはこんなくだらない大学に来てもしようがない。他の大学に行け！」と言うので、「私はまだこの大学のことを知らない。よく知っているはずのあなたがくだらないと思うのなら、あなたが出て行けばいいだろう」と言い返してやった。これが影響したかどうかはわからないが、定年まで46年間も本学で過ごすことになった。少し長く居すぎた気がするが、気持ちの上では他所に出てみたいと強く思っていた。特に若い頃はそうだったが、当時の上司は転出を認めてくれなかった。これが反面教師になって、私が教授になってからは“後輩の研究活動へのできる限りの支援と、研究室は絶対に楽しいところであるべきだ”ということを通した。研究室の忘年会も毎年自宅で盛大にやった。学生と若手あつての大学だ。東工大にはそのことを大切にして成長し続けて欲しい。



小長井 誠（電子物理工学専攻）

研究室も昔は余裕があり、土曜日の午後はバドミントン・野球・ソフトボールを楽しんだが、徐々に忙しくなり、超多忙の中で定年となった。教員になって一番印象深かったのは、法人化後の「研究戦略室」で室長補佐を務めたことだ（研究戦略室がらみで米国に視察に行っていたときに、イラク戦争が始まったのも忘れることができない）。いろんな部局の方々と知り合いになれたことに加え、マネジメントの醍醐味を味わうことができた。この経験は研究室の運営にも生かすことが出来たし、今後の活動にも生きると思う。産学連携に道筋をつけることができたのも一つの置き土産になるのではないかと期待している。



鈴木 博（通信情報工学専攻）

電電公社とNTTに22年ほどいて、1996年に本学に戻った。電電公社での最初の印象は、「お役所的」というものだった。それと同じ感じを本学に戻ったときに持ったが、今はだいぶ変わったことを実感している。最初は理工学国際交流センターでアジアを中心とする拠点方式の交流の世話をさせてもらい、その中で化学工学系の先生方との付き合いで化学の勉強もさせてもらった。2001年に学術国際情報センターに統合されたのを機に、国際交流からは少し離れ本格的に研究に専念した。優秀な学生と准教授に恵まれ幸せだった。これから大学も改革に向けて突っ走るわけだが、そういう大きな「相転移」を乗り切るためには健康が大事だということも忘れないでほしい。



藤岡 洋保（建築学専攻）

建築史が専門というと、最先端の研究をしておられる先生方からは少し胡散臭く思われるかもしれないが、私の考えでは、人間は後ろ向きに未来に向かって歩いてゆく存在だ。未来はすごく気になるが、原理的にいま見ることはできない。しかし、どの方向に進むかは今決めなければならない。そこで頼りになるのが今見えている世界、つまり過去だ。過去の中には無数の事実があるが、その中から意味があると考えられるものに注目し、それを組み合わせて未来に示唆を与える視点や思想を生み出すのが歴史家の仕事だ。2010年に百年記念館でキャンパス展を開き、大岡山キャンパスの変遷を辿ったが、その時に本学には史料がほとんど残されていないことを痛感させられた。過去を振り返らなければ未来はない。よりよい未来を築くためには、過去をきちんと見なくてはならない。今後の大学のあり方を考えるためにこそ、過去を検証可能にしていきたい。



関根 光雄（分子生命科学）

入学以来、丸々 47 年間も本学で過ごしたので、Made in Tokyo Tech の典型といえる。「井の中の蛙大海を知らず」になったかどうかは周囲の評価に委ねるとして、私自身は「外向き志向」が学生の頃から強く、入学した時は、建築学科を卒業したら留学しようと思っていた。実際には化学科に進学したが、ドイツ語などはかなり勉強した。LL 授業では、何回も何回も繰り返す方式だった。あれだけ徹底的にやらされると、いつの間にかドイツ語が口をついて出るようになり、今でも短いフレーズは覚えている。語学の勉強はかくあるべきだ。4 年の時に IAESTE (The International Association for the Exchange of Students for Technical Experience) の支援でノルウェーに 2 ヶ月いった。この時に指導教員が気配を察したのか、出発の直前に呼び出されて、「留学は博士号をとってからの方がいい」と諭され、当時化学科では皆そうしていたので、素直に従うことにし、長期の留学は先延ばしにした。博士号をとって、いよいよ外国へと準備をしていたら、今度は、「留学なんていつでも出来る。もうすぐ助手のポストが空くから、助手になってから留学しなさい」ということで、4 ヶ月のブランクの後に助手となり今日に至ってしまった。結果的にだまされた形だが、外向き志向 (& 思考) は今日に至るまで弱まることはなかった。長く 1 箇所にとどまったことで研究は思いつきでき、満足すべき結果も出せた。特許が将来花開いてくれないかと期待もしている。最後の最後に研究科長を引き受けることになり大変な思いをした。生命理工学研究科には個性の強い方が多く、科長職は“猛獣使い”とも言われていたからお察しいただけるだろう。この仕事から解放されると思うと幸せな気分になる。



大野 隆造（人間環境システム専攻）

昭和 47 年に建築学科を卒業しブラブラしていたら、清家先生に「80 周年記念館の設計をするから手伝え」と言われて、1 年半ほど下働きをしていたが、学長が代わったとたんに、「清家さんの設計した建物は使いにくい」ということで没になり、私（80 周年記念募金会で雇われていた）も首になった。そこで大学院に進むことにしたのが縁で、長く大学に関わることになった。私の専門は「建築心理学」で、人がある空間で過ごしたとき、建物や街並みからどういう心理的影響を受けて、どういう行動をするかを研究してきた。「中身で勝負」といわれるが、外見も大事だ。漱石の『三四郎』がこのことを語っているので引用しておこう：「三四郎は見渡す限り見渡して、このほかにもまだ目に入らない建物がたくさんあることを勘定に入れて、どことなく雄大な感情を起こした。『学問の府はこうでなくてはならない。こういう構えがあればこそ研究もできる。えらいものだ』——三四郎は大学者になったような心持ちがした」。人的・文化的環境はもちろんだが、それを支える物理的環境も大切だ。キャンパスに足を踏み入れただけで気が引き締まり、建物の前に立つとここで働いていることに誇りが持て、そして研究室に入ると気持ちが活性化されるような、心理面に配慮したキャンパス作りをお願いしたい。Homecoming day にはその様な姿を見せて貰うのを楽しみにしたい。



廣田 薫（知能システム科学専攻）

私立大学の教員を経験した後、本学に戻り 20 年ほどになる。本学に招かれた時に、仲介していただいた先生から美味しい話を 3 つ聞かされた。(1) 東工大は講義が少ない、(2) 東工大の学生は優秀で、ほっておいても時間が経って時がくれば、立派な論文を書いて世の中に出て社会に貢献してくれる、(3) 退職金や年金で老後は（比較的）優雅に暮らせる、というものだった。これらの話は、時間が経った今でも本当だったといえる部分も多い。多数の日本人学生のほか、28ヶ国から 101 名の留学生・客員研究員の方達と、研究生生活をエンジョイできたのは幸せだった。4 月からは、北京理工大学で海外 1000 人計画教授、および日本学術振興会北京研究連絡センター所長として勤務する予定なので、月の 2/3 は北京で過ごすことになりそうだ。健康に気をつけて、さらなる一仕事をしたい。



米崎 直樹（計算工学専攻）

九州の田舎から上京した当初は、東京の人が皆大人に見え、大学紛争の時も、遠くから見つめていた記憶が鮮明に残っている。海外に行きたいという希望を強く持っていたので、わりと得意だったドイツ語の検定試験（Goethe Institut ドイツ文化センター主催）を受け、IAESTE（国際学生技術研修協会）の制度を利用してドイツ企業に研修に行くことに決まったが、受け入れ先の企業が、「前回受け入れた東工大生が余りにもひどかったので、もう東工大生は受け入れない！」と断られてしまった。次の候補はイスラエルの企業だったが、運悪く戦争が勃発しイスラエルの治安が悪化したために、ここもご破算になった。結局この時は、外国行きは実現しなかった。中学の頃から人工知能に興味があったので卒論では計算機関係の研究室を選んだ。研究室配属の時に、小長井さんが「オレは太陽電池に決めている。定員オーバーになるとまずいので、オマエは別の研究室にしてくれよ」と言うので、内心「希望が重ならなくて良かった。計算機の研究室に入りやすくなる」と思った。ドクター修了時に出来て間もない情報工学科の助手になった。その頃は、情報工学の学問体系が出来つつある揺籃期で、日本ではまだ講義も手探り状態だった。私自身はソフトウェアをいかに間違いなく作るかということの研究しているが、講義を担当するようになってからは、「プログラム理論」、「プログラミング言語」といった講義を新しく作り、それらを基に教科書を書き、改訂を重ねた。教員としての最も基本的な醍醐味を味わえたと思う。そのうちに「独り立ちしないといけないな」という思いが強くなり、一人で外国



藤井 修二（情報環境学専攻）

に行くことにした。British Council の試験を受けて採用され、エジンバラ大学に行くことになった。そこで世話になった研究室は 当時 人工知能分野でスタンフォード大と並ぶ世界の双璧の一つだった。コンピューターサイエンスの最先端を学んで、それを帰国後の教育研究に生かしたが、兄弟子が北陸先端科学技術大学院大学で情報工学分野を立ち上げる手伝いもすることになり、3年間ほど毎週東京と金沢を往復する生活を強いられた。本学でも最後の頃は管理職的な仕事が増え、学生の指導に十分時間が取れなくなったが、結果的には、妙な表現だが、“学生に任せる指導”が功を奏したようでもある。今後はいくつかの大学で教える機会をもらえそうなので、自分が一生懸命に身に付けたものを後輩に伝えたい。情報系では私たちの世代が2代目で、今は3代目といえる。3代目が盛衰を決めるといわれるが、本学に関しては3代目は優秀で頼もしい。優秀すぎて他大学に引き抜かれるので困っている。執行部には、「そこを何とか」とお願いしたい。

私は建築環境・設備（クリーンルームや空気清浄）を専門としている。これまで、総理工の社会開発工学（助手、現人間環境システム）、建築学科の建築環境工学（助教授）、そして情報理工の情報環境学（教授）の3箇所を経験した。特に最後の情報環境学専攻では、建築・機械・土木などの先生方と学際的な付き合いをすることができた。これは私にとって宝物となっているが、今度の改革で、学際的な専攻に所属している先生方がそれぞれ建築や機械などの元部局に戻る方向で動いているのが心配だ。少し気になっていることを申し上げたが、私自身に限って言えば、46年間（人生の約2/3も）本学に世話になり、非常に居心地のよい環境で、やりたい事をやらせて貰い、幸せだった。



圓川 隆夫（経営工学専攻）

随分長い間世話になり，教育研究に関してはもう言い残すことはない。MBA との関わりについて，反省を込めて紹介したい。末松学長の時に MIT と同じようにビジネススクールを作るといふ話が出た。MIT の場合は営業のスタッフや専門の支援スタッフが揃っている。それ無しにはやれないと抵抗したが，大学院重点化のときに研究科を作る方向で検討が進んだ。学内的には「経営工学研究科」という名称は受け入れられず，「社会理工学研究科」に落ち着いた。2003 年頃に MOT ブームがあり，本学でも理財工学研究センターなどと並んで，専門職大学院の技術経営専攻を作ることになった。社会理工学研究科の中に作ろうと思ったが，当時の相澤学長は「とにかく全学組織を作れ。東工大らしく博士課程まで有るものにせよ」ということで，大慌てで資料を作り何とかイノベーションマネジメント研究科（IM）の設置にこぎつけたが，現在では少しほころびが出て，迷惑をかけているのではないかと心配だ。今度の改革では IM は見え辛くなっているが，重要な分野であり世界的にもニーズは高まっているので，5 年後，10 年後には支援体制がしっかりした形でビジネススクールが実現することを期待したい。



横田 眞一（精密工学研究所 高機能化システム部門）

料理が待っているそうなので簡単にする。私も 46 年間 世話になり，精密工学研究所のすずかけ台への移転を経験した。当時は何もなく，学生と一緒にテニスコートを作ったのを覚えている。私の研究室のモットーは「よく学び，よく遊べ」だったので，そのための環境を整えることから始めた次第だ。人は環境によって作られる側面が強いので，優れた環境を用意することが大切だ。大学人が独創的な発想に基づき創造的な仕事をするにより，それを見た学生が後に続くという好循環を生み出す環境を作り上げて行って欲しい。そのためには教員に時間的余裕が不可欠だろう。



里 達雄（精密工学研究所 先端材料部門）

東工大には40数年もお世話になり感謝している。最後の3年をすずかけ台で過ごした。すずかけ台に移った当初は大岡山とすずかけ台の両方に研究室があったので、東急の電車には日に何度も乗ることが多かった。最後の数年間は、学生のキャリア（就活）サポートをした。そこで学生と話していて痛感したのは、東工大生はいい研究をし、いい修論をまとめる優れた力を持っているが、往々にして、人と話をするのが苦手な、本来の力を発揮しきれないということだ。その解決の一助になればと、蔵前工業会の協力を得て、企業で働く先輩と面談する機会を設けたが、盛況かつ好評だった。これに類した企画を組むとともに先生方が忙しくなりすぎて、学生と話す機会が減っている現状を改善する必要があるだろう。



長 こずえ（外国語研究教育センター）

ドイツ語が専門なのでドキッとしながら何人かの先生方の話を伺った。若かった頃は真剣にドイツ語の勉強をしていたが、ここ10年ほどは、日本語の外来語のアクセントについて研究した。数年前にはドイツの老人ホームを出張で見学させて貰うなど、自由な研究生活を送らせて貰った。感謝の念に堪えない。



岩井 洋（フロンティア研究機構）

最初に話をした藤田先生とは、東大の駒場の教養学部の人にクラスと一緒に親しくさせてもらったが、今こうして定年の時に同じ席にいるのには感慨深いものがあり、縁というものを感ずる。私は東芝に26年間勤め、大学に呼ばれたが、来る前には（1）大学の先生は奇人変人が非常に多そうで私の前途は多難となりそう、（2）大学の先生には自由な時間がたっぷりあるだろうと思った。この予想は2つとも外れた。東工大の先生方は非常に常識的でいい先生ばかりだった。同僚に恵まれたことを感謝している。会社の場合は、上からの命令で動くので不自由さや時として理不尽さを感じることがある。これに比べたら大学には余裕と暇があり自由な研究に専念できると期待したが、事情は少し違った。大学には大学なりの忙しさがあつたが、全体的に見れば東工大で仕事ができて本当によかったと感謝している。VBL（ベンチャー ビジネス ラボラトリー）やFRC（フロンティア研究センター）の活動を通して知り合った先生方は皆 仕事熱心で、夜も遅くまで研究室にいて、感心させられた。そういう先生方との間に築き上げられたネットワークは私にとっては大きな財産で、今後も大切にしていきたい。